

分段徒歩環島のすゝめ

日本台湾交流協会台北事務所主任 中村 親治

私は台北事務所に勤務してきた3年間の台湾生活で、台湾一周を何回もの日程に分けて少しずつ歩いていく所謂「分段徒歩環島」に挑戦した。多くの人が自転車やバイク等で台湾を一周しているが、徒歩でしか味わえないマイペースで時々ハードな魅力や発見の溢れる分段徒歩環島を皆さんに紹介する。

1. 環島とは

私は日本台湾交流協会台北事務所に3年前に赴任し、その後、約2年半かけてゆっくりゆっくりと何回にも分けて徒歩で台湾を一周した。台湾一周とは、台湾では「環島」と呼ばれ、台湾本島の周回約1,000kmを徒歩、自転車、バイク、車、鉄道等で一周するというものだ。

台湾ではこの活動は多くの人に知られており、実際に多くの人がチャレンジしている。一般的にはバイクや自転車でチャレンジする人が多く、環島の主要ルートとなっている道路では日々、背中に「環島中」（台湾一周中）と書かれたダンボールや布をつけているライダーたちを目にすることができる。「環島」の中でも徒歩で環島をすることは「徒歩環島」と呼ばれ、1、2か月をかけながら台湾を一周するものであり、バイクや自転車と比べてチャレンジする人は少ない。退職や卒業等で長期の時間を作ってチャレンジする人が多く、比較的ハードルが高いものとされている。

一方で徒歩環島では車や鉄道等とは違い、1日に歩く距離も人それぞれ（私の場合は1日約20～30kmほど）でマイペースにゆっくりと、その土地土地の空気を感じながら移動できるため、徒歩環島経験者の中には「台湾を知るための一番いい方法だ」という人もいるほどだ。

2. 分段徒歩環島

私は仕事で台湾に来ているため、1、2か月の休みを取ることは不可能であり、週末や夏季休暇等を利用し、何回にも分けて台湾一周をすることにした。初めは私が住んでいる台北から歩き始め、その後は前回歩き終わったところまで公共交通機関で行き、2、3日歩いてまた公共交通機関で台北に帰って来て、ということを繰り返す方法を取った。この方法を「分段徒歩環島」（分段：時間や区間などを分けること）と言う。この方法はあまり知られていないが、多くのメリットがあり、この場を借りて私の環島の記録や私が環島で感じた台湾を皆さんに紹介する。



徒歩環島中の筆者

3. 自己紹介

そもそも私は日本にいた時から歩くのが好きで、東海道（これも分段）、琵琶湖一周、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路（の

一部)等様々なところを歩いて来た。自転車等の特別な道具も必要がなく、リュックサック一つで身軽に行けて、歩きたい時に歩き、疲れたら立ち止まって休めばいいということに私は最大の魅力を感じている。また台湾では徒歩環島のほか大甲媽祖繞境も好きで全行程ではないが2年連続で参加している。(機会があれば大甲媽祖繞境の魅力についても皆さんに紹介したいものだ。)

私が歩くのが好きだと聞きつけた当時の副代表が私に「ぼーれんさん」というニックネームを授けてくれた。台湾語で歩くという意味の「歩輦(ボーレン)」に日本語の「さん」を付けたのだ。台湾の人との仕事でもこのニックネームのおかげで徒歩環島の話で盛り上がり、また会うたびに「ぼーれんさん、今はどこを歩いているんだい?」という話から始まり、とても良いアイスブレイクのネタとなっている。

4. 一期一会

徒歩環島の一番の醍醐味と言えばやはり一期一会の出会いだろう。しかし、私の場合は一期一会の様子が他の人とは少し違うかもしれない。私は背中に「環島中」と掲げて周りの人にアピールをしながら歩くことはあまりしない。そのため、まず私に声をかけてくる人は、“応援”ではなく、先に“心配”が来るのだ。台湾は車・バイク社会で市街地以外は徒歩で移動する人はほとんどいない、また徒歩環島をしている人もそこまで多くない(私自身も徒歩環島中に他の徒歩環島の人と出会ったことは数度しかない。)

私は夏の炎天下を好んで歩くためもあるが、そんな中で国道沿いを一人で歩いているというだけで違和感がかなりあるようで、時々車やバイクに乗った人が声をかけてくれるが、声をかけてくれた人はほぼ全て第一声が「大丈夫?乗っていく?」なのだ。彼らの目には何らかの理由でバス等に乗れずに仕方なく歩いて目的地に向かっている人と見られるのだろう。そのような時は、申し出を断るのは忍びないが、「徒歩環島中なので自分で歩きます、ありがとう。」と丁重にお断りする。そうするとたいてい、「本当に大丈夫か?」というような顔をしながらも「加油!」と激励してくれ

る。

その他、歩いていると、多くの人が私に食べ物や飲み物をくれた。台湾式煮卵の茶葉蛋、釈迦頭、クッキー、ジュース、ミルクティーなどなどいろいろなものをもらう。その他、バイクでツーリングをしている人は通り過ぎざまに「加油」と言いながら、指で「讚!」をしてくれる人も多かった。どの出会いも一言二言かわすだけのとても短時間の交流ではあるが、この台湾の人たちの優しさが疲れた体や心への最高の癒しとなった。



台東の道中でもらった釈迦頭とドリンク

5. 野良犬、番犬時々猿

私の徒歩環島は犬との闘いでもあった。私は子どものころ、家族にも普通に噛んでくる愛らしい飼い犬と一緒に暮らしていたため、何をしてくるか分からないよその犬が怖い。台湾の地方では野良犬や放し飼いにされている犬が多く、徒歩環島中は多くの犬との遭遇があった。

特に衝撃的だったのが屏東県の橋の下での出来事だ。橋の下は公園となっており、公園沿いの道を歩いていると野良犬が寝転がってくつろいでいる様子が見えた。起こさないようにゆっくり遠くから通り過ぎようとしたその時、別の犬が猛烈に吠えながら駆け寄ってきた。私が「ああ、終わった」と思った次の瞬間、車がクラクションを鳴らして近づいてきて、犬は驚いて逃げて行き難を逃

れることができた。

屏東県の橋の下では奇跡的に無事であったが、それ以来私の犬への警戒は極度に高まった。野良犬を進行方向に発見すると、道路を渡り、歩く車線を変える。その犬がどれだけゆったりと寝ていてもだ。また犬の横を通過するときは車が付近を通過するタイミングで車の流れと一緒に歩く。たいていの犬は車が走る道路を超えては追ってこない。このような涙ぐましいワンちゃん対策が私の徒歩環島での一番の困難なことだったことだと思う。

なお、一つ付け加えると多くの犬はただ道端でゆっくりしているだけで危害を加えてくるわけではない、野良になったのもこの犬たちが悪いわけではない。また出会った犬の中にはやつれたり、足を引きずったりしている犬もいた。私は犬が好きなのでこういった状況はとても悲しく思う。野良犬に罪はない。

また、「田舎の放し飼いの番犬」もなかなか恐ろしい。彼らはとてもお利口で家の敷地とその前の道路までが守備範囲で、家の前の道路を歩いていると威嚇しながら走り寄ってくる。もうこうなったら立ち止まって、騒ぎに気付いて飼い主が家から出てきて犬に注意してもらうのを待つしかない。

その他、山間部にはほぼ犬はいないが猿がいる。猿はキャツ、キャツと木を揺らしながら私の行動を警戒している。最初は木の上から猿が警戒の声を出してくるとのがとても怖かったが、彼らはこちらに近寄って来ることもなく、無事に過ごせた。このように徒歩環島での出会いは人や景色や食べ物だけではなく、犬や猿との一期一会も大切な出会いなのだ。

6. 歴史に触れる

私は歩く時にあまり下調べをしない。歩きながら自分は今どこにいるのか、どこの道を行けばいいのか、地図アプリとにらめっこしながら歩くようにしている。ある日、嘉義から台南方面に歩いていて、ふと地図を見ると、今自分が「烏山頭」にいることに気づいた。烏山頭は台湾に住む日本人なら一度は耳にしたことがある八田與一氏が日

本統治時代に建設に携わった烏山頭ダムがある場所だ。一度は訪れてみたいと思っていたが、思いがけずたどり着いたことに感動した。

他にも屏東県の東部を台東に向かって歩いていると牡丹郷という地名を目にした。台湾出兵とも呼ばれる牡丹社事件となった場所である。その場で調べたところ、今自分が歩いていたすぐ近くの海岸に台湾出兵のきっかけとなった「宮古島島民遭難事件」の宮古島島民が漂着したということだった。約150年前にこの場所から日本と台湾の大事件が起こったのかと感慨深く美しい海岸線を歩いた。

また台東の海岸線で大海原を見ながら歩いていると、国立科学博物館が丸木舟に乗って台湾東部から与那国島まで3万年の「最初の日本列島人」が成し遂げた大航海を再現しようとする実験活動のことを思い出した。まさにここから日本人のルーツの一部が黒潮を乗り越えて沖縄に渡ったとのことだった。その3万年後にまた自分が日本からやって来てこの地を歩いていると思うと感慨深いものがあつた。

その他、羅東の林業文化園區、瑞芳の猴硐神社など大小含め多くの歴史が感じられる場所に歩くうちに偶然に出会うことができた。

7. 夕陽

台湾一周で一番いい時間帯と言えば、夕暮れ時だ。少しずつ日が陰り、暑さも徐々に和らいでくる。そんな心が落ち着いてきた中で見る夕日は格段に美しく、また場所や時間によって様々な表情を見せる夕日に魅了される。西部の海沿いの少々強めの西日、屏東の山間部の一面をオレンジ色に変える夕陽、東部の海沿いの山に隠れかけた日の光が雲に溶け込み紫がかった薄いオレンジ色に空を染める様子。

どの夕陽も疲れた体を癒し、また夕陽の美しさに驚かされる短いひと時だ。しかし、そんな癒しの時間も足を止めている暇はない。夕陽がきれいだということは日没が近づいているということ。あっという間に真っ暗になる。急いでその日の目的地に足を進めなければならない。



屏東の山間部をオレンジ色に染める夕陽

8. 宿

私は徒歩環島では極力宿を事前に予約しない。気ままに行けるところまで行ってその宿に泊まるというのが自分の中の理想だ。しかし、実はそうまくいかなない。宿は街にしかないため日暮れまでに街にたどり着かなければならないが、地方では街と街の間は山や畑などで電灯もまばらで人通りも少ない。真っ暗になってしまい歩くのは危ないため、何としても日没までに街に着く必要がある。そのためその日歩き始める前に今日はどこまで歩けそうか常に地図を見て現在地を確認しながら歩かなければならない。そうしてたどり着いた街でも民宿がない小さな街であることもある。特に地方の街だと小さな民宿しかないことも多い。そんな時は電車やバスで宿のある街まで行って泊まってまた翌日電車やバスで戻って歩き始めることにしている。例えば、屏東県の林邊まで歩いた際に小さな街で泊まれる宿が見当たらず、仕方なく少し先の枋寮まで台鉄で行き、枋寮で夜を過ごし、また翌朝林邊に台鉄で戻り徒歩環島を再開した。また蘇澳では連休と重なり蘇澳の宿がなく、宜蘭縣の羅東まで台鉄で行き一泊して翌日戻った。

また注意すべきなのは春節などの大型連休だ。大型連休を利用して徒歩環島を進めたいところだが、大型連休中は電車や宿が満員となったり、宿の価格が驚くほどに高く設定されたりすることがよくある。そういう時は無理せず台北で過ごそう。

9. 好きな場所

一例として徒歩環島で出会った私のお気に入りの場所をいくつか紹介する。1箇所目は南投縣草屯の観光夜市だ。台北の観光客向けの夜市とは少し違い、地元の人が週末を楽しむ憩いの場所となっている印象だ。特に私が気に入ったのは台北ではありえないほどの大規模な輪投げだ。台湾一周中に訪れた際は疲れていたので挑戦できなかったが、再度絶対に訪れてチャレンジすることを自分自身に誓った（まだチャレンジできてない。）

美しい風景で言うと屏東縣龍磐の断崖絶壁からの眺望だろう。龍磐は台湾本島最南端の鵝鑾鼻からほど近い、平らで見晴らしの良い草原が広がる場所であり、美しい海やこれから歩く東部の山も一望でき、非常に気持ちのよく歩くことができる。

また大きな山場としては蘇花公路も欠かせない。今は残念ながら4月の大地震の影響で歩いて蘇花公路を歩くことは難しいと思うが、私が2023年の秋に蘇花公路を歩いた頃は、車通りが多い長いトンネルや断崖絶壁の道を注意深くかつ大自然の美しさに感動しながら歩くことができ、あの陰しくも美しい景色は忘れられない。

その他、私は大きな川を渡る橋を歩く時も好きだ。台湾西部の町は山間部から海へと向かう川が街と街の境となっていることが多く、その橋を渡



草屯の観光夜市の輪投げ

ると次の街に入ったという達成感が感じられる。川を越えることで歩く場所の雰囲気もガラッと変わる、そんなことを目にできるのも徒歩台湾一周の大きな魅力だろう。

紹介するときりがないが、徒歩環島では非常に多くの美しい景色や印象深い場所に出会うことができる。皆さんもぜひ自分にとってのお気に入りの場所を徒歩環島で発見してほしい。

10. 歩いている途中何をしているの？

私は徒歩で台湾一周をしている際は一日10時間ぐらいあるくこともあると言うと「歩いている途中は何をしているの？飽きない？」とよく聞かれる。もちろん飽きる。台湾一周を始めた当初は音楽を聴いていたが、何時間も音楽を聴き続けるとさすがに飽きる。また、孤独感にも苛まれる。そのため、今は歴史に関するポッドキャスト番組を聴いている。集中して歴史の世界に入ることができるし、人の話し声を聴くことで孤独感も軽減することもできる。

私のオススメは「玄奘」の回だ。中国からインドまで仏教の経典を求め歩いて行った徒歩界のレジェンドであり、彼の冒険と情熱、また彼の時代の仏教が追究した唯識の思想を考えると、歩いている中のこの暑さと疲労さえもただ自己の認識に他ならないと無限に歩けることができる（気がする（笑））。その他、何時間もある「第一次世界大戦」シリーズや「フランス革命」も一気に聴くことでその歴史の流れがよく分かり、聴きごたえがあるためオススメだ。

11. 私にとっての最適な季節

徒歩は天気の影響をもろにうける。そのため歩きやすい季節に歩くのが一番ではあるが、私は夏が好きで夏によく歩いていた。台湾の夏は熱い。灼熱の中、汗をダラダラたらしながら、何時間も歩くことがたまらない、生きていることを実感し、疲れが至福に変わる。そうした暑い中歩きたどり着いたコンビニでの休息がまさに至福のひと時だ。特に台湾東部では休憩できるコンビニが10kmに一店ぐらいしかなく、コンビニが命綱となっている。コンビニにたどり着き、トイレを済

ませ、冷房の効いたイートインコーナーでカレーを食べ、しばしの休息を取ると自然とまた頑張って歩こうという気持ちが出てくる。

もちろん、春も冬もそれぞれの季節を味わえるのが分段のいいところだ。冬は「基隆雨」と言われるように基隆や宜蘭周辺は特に雨が多く、晴れの日を選んで歩こうとするとなかなか歩けない。そんな時は、しとしとと降る雨の中を歩き、「基隆雨」を体感するのもいいかもしれない。（もちろん、気象や自分の体調を考慮してあるくのが大前提。）

12. 農産物天国台湾

徒歩環島中には多くの田畑や農産物の販売所、露店を目にする。苗栗では文旦、嘉義ではサツマイモ、台南では菱角やイチゴ、枋寮では蓮霧、屏東ではマンゴーやドラゴンフルーツ、台東では釈迦頭、パイナップル、米、花蓮ではスイカやミカン、宜蘭では葱などなど。その他、あちこちでエビや魚の養殖池やガチョウの飼育場も見られた。道沿いにも農場が広がり、行く先々で農産品の露店があり、その土地で採れた果物等が売っている。

私にとって特に印象深いのは菱角だ。台南付近で水田のような水の張った畑で人々が何かを収穫しているけど何を取っているのだろう、それとこの付近の道で見かける真っ黒の物体とともに「菱



台南の国道沿いにある「菱角」の露店

角」と書かれた看板、国道沿いの露店で売っているあの黒い物は何だろうと疑問に思っていた。インターネットで調べてみると菱角という農産物があると初めて知った。露店を覗くと確かにそれらしきものが売られている。水の張った畑で菱角の収穫作業をしていたのだ。

国道沿いの露店にはその土地土地の果物や農産物が売られている。土地土地により変わるこれらの作物を見るだけでもとても楽しい。これも車や自転車の旅であればすぐに通り過ぎてしまうので、こういう気づきも徒歩ならではのだろう。

13. 終わりに

現在は移動をするだけであれば、車や鉄道で目的地まで一瞬にしてたどり着くことができるが、私はマイペースに徒歩の旅を楽しむことにより、多くの気づきを得るとともに、台湾の人たちの文化や生活、優しさに触れることができた。普段の旅行や仕事ではなかなか訪れる機会がなかったり、通過するだけとなったりしてしまう場所でもそれぞれの地には人が住み、生活を営んでいる。

徒歩環島では都市部、工業地帯、耕作地、原住民のゆかりの地など様々な場所を歩き、様々な台湾の表情を見ることができた。そして、この表情のすべてが台湾なのであり、多様な台湾を実感することができた。まだまだ台湾のすべての表情を

見れたわけではないが、多様な表情が台湾にはあることを知ったことで、もっともっと自分の知らない、まだ出会っていない台湾の表情を見てみたいと台湾一周を終えた今感じている。

みなさんも徒歩台湾一周と身構える必要はない。「分段」で少しずつ、何年かかってもいい、ゆっくり、ゆっくりと、まだ知らない台湾に出会う旅に出てみてはいかがだろうか。ちなみに私は近々2周目に出発する予定だ。1周目で出会った台湾の素敵な表情にもう一度出会うことやまだ見ぬ台湾の表情と出会うことに期待して、マイペースで時とハードな旅の第一歩を再び踏み出してみようと思っている。



環島の風景（台東）